

# キャベツ・冬どり（春系305）

海匠農林振興センター

## 1 地区名（集団名）

銚子市全域（銚子野菜連合会）

## 2 栽培戸数、栽培面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 110戸
- (2) 栽培面積 70.2ha
- (3) 収穫量又は出荷量 3,488 t（収穫量）
- (4) 出荷先又は販売方法

大田市場など京浜地域を中心に指定に指定集荷業者21社

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	5回	8回
化学肥料（窒素分量）	13.68kg/10a	14kg/10a

## 4 事例のあらまし

銚子地域は、冬場の温暖な気候を生かし冬・春キャベツの生産が盛んで、栽培面積1,880ha、産出額59億6千万円と全国を代表する大産地です。

こうした中、消費者と生産者のお互いの顔の見える農業の実現や自然環境にもやさしい安全・安心な農産物の生産・販売を目指すため、平成15年に「ちばエコ農業産地」の指定と、「ちばエコ農産物」の認証を受け、「キャベツ」の栽培に取り組んでいます。

なお、栽培にあたっては、「統一栽培暦」に基づくとともに、堆肥の投入を主体とした土づくりや、エン麦等の地力増進作物を輪作体系に組み入れるなど持続的な農業を実践しています。

## 5 背景・動機

銚子地域は、本県の主要野菜である「キャベツ」を中心に県下第1位の生産を誇る50年以上の歴史を持つ大産地です。気象条件は年間平均気温15℃で積算降水量1,500mmと比較的温暖的な気象条件に恵まれています。キャベツ栽培は「甘らん」の名で、昭和28年から栽培が始まり、昭和32年に「灯台印キャベツ」の商標登録をし、昭和41年には国の野菜指定産地の指定を受け、生産の安定、出荷の近代化を進め、今日では首都圏の台所として栽培面積1,880haと全国を代表する産地となっています。この地域の主要な生産組織

であるJAちばみどりの銚子野菜連合会は、平成15年にいち早く「ちばエコ農業産地」の指定と、「ちばエコ農産物」の認証を受け、「キャベツ」の栽培に取り組みました。

「ちばエコ農業」に取り組むきっかけは、当時銚子野菜連合会の会長であった大根氏が、県のちばエコ農業策定に係る検討会に参加していたことにより制度の内容等をいち早く理解したことや、新聞やニュースなどの情報等により多くの生産者の取り組み意欲が強かったことです。

このため、組織の本部役員や理事及び農業関係機関等で協議検討を重ね、産地としてさらに先進的な取り組みとして、消費者と生産者のお互いの顔が見える農業の実現や自然環境にもやさしい安全・安心な農産物の生産・販売を行うこと、栽培履歴の記帳と開示などにより野菜の有利販売を実現することを目指し、JAグループ千葉の「もっと安心農産物」と併せて「キャベツ」の「ちばエコ農業」に取り組むこととしました。

なお、栽培にあたっては、有機質を主体とした肥料や生物農薬（BT）剤の活用及び使用回数の限定など、「統一栽培暦」により取り組むこととしました。



ちばエコ生産ほ場は  
「生産ほ場表示板」を掲示する



ちばエコキャベツ畝立局所施肥による  
施肥低減技術試験及び定植作業の様子

## 6 栽培方法（産地事例より）

### (1) 栽培管理

作業名	実施年月日	備考
前作収穫終了	平成16年4月30日	前作終了後、地力増進作物であるエン麦を作付けし、緑肥としてすき込みを行っている。
は種	9月6日	
耕起	10月16日	
定植	10月17日	
中耕	11月3日	
病虫害防除	7月12日～12月6日	
収穫開始	平成17年2月20日	
収穫終了	2月28日	

### (2) 使用資材

#### ア 土づくり・施肥等

(10a当たり)

使用銘柄（N-P-K）	実施年月日	施用量	全 N	化学N
苦土石灰	平成16年8月5日	100kg		
鶏糞堆肥（2-6-3）	8月17日	0.4 t	8kg	
リンスター30（0-30-0）	10月16日	40kg		
有機配合8号ペレット（8-8-4）	10月16日	120kg	9.6kg	6.48kg
りん硝安入り化成高度S842（18-4-12）	11月3日	40kg	7.2kg	7.2kg
合 計			24.8kg	13.68kg

#### イ 病虫害・雑草防除等

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
バスアミド微粒剤	根こぶ病	平成16年7月12日
※スピノエース顆粒水和剤	コナガ、ヨトウムシ	10月1日
アフーム乳剤	コナガ、アオムシ	10月28日、12月27日
アドマイヤーフロアブル	アブラムシ類	10月28日
※エスマルクDF	コナガ、ヨトウムシ、アオムシ	11月25日
ロブラール水和剤	菌核病	12月6日
化学合成農薬使用回数5回（総使用回数7回）		

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

### (3) 「ちばエコ農業」への取り組みにあたって留意している点

栽培にあたっては、野菜の品質の安定・向上に留意するとともに、消費者等に対して安全・安心な農産物の供給を図るため、JAちばみどり、JA全農千葉、農総研東総野菜研究室、海匠農林振興センターなど関係機関で「統一栽培暦」を協議・検討し、その

結果を各会員に対して、ちばエコ農業説明会を開催し周知徹底を図っています。

また、施肥体系について有機質を主体とした肥料で良品質生産を行うため、各肥料メーカーと協議の上、肥料試験を実施し銘柄の選定を行っています。

その他、以下に示した内容を基本に、「ちばエコ農業」に取り組み環境にやさしいエコ産地銚子のPRを図るため、産地として努力しているところです。

- ア 堆肥の投入を主体とした土づくりを行うとともに、エン麦等の地力増進作物を輪作体系に組み入れるなど持続的な農業を実践します。
- イ 除草剤を使用せず、手取り又は機械による中耕除草を行います。
- ウ 無理な作型による病虫害を避けるため、適切な種日を定めます。
- エ 育苗は寒冷紗を使用し、害虫の耕種的防除を行います。
- オ 化学合成農薬に含めない農薬を使用するとともに、フェロモントラップを活用し発生状況に基づき適期防除を行います。

## 7 今後の展望等

3年目を迎え、生産技術はほぼ普及定着しており、農業者の技術レベルの向上が図れました。さらに、今後も統一栽培暦により農薬の使用方法などを厳守するとともに、化学肥料の低減による環境にやさしい農業の推進を行います。また、耕畜連携による地元堆肥の有効利用を推進するとともに、エン麦等の緑肥作物を活用した土づくりにより持続的な農業を行います。

近年は流通の不安定要素が多く、本年は価格暴落により産地廃棄を実施するなど、生産農家の経営が逼迫しました。こうしたことから、「ちばエコ農産物」をはじめとした野菜について契約販売等による価格安定は必要不可欠です。契約販売先の維持、そしてさらなる拡大を図るため、収穫されたものを一刻も早く消費者や実需者へ供給することが急務な課題となっています。

このため、現状の通風予冷システムから真空予冷システムに切り替え、新鮮度の高い野菜の供給を行い、契約出荷等の維持拡大により農家経営の安定と大野菜産地を維持・拡大するよう努力していきます。

また、地元スーパーなどであまり販売されていないことや、消費者からどこへ行ったら買えるのかなどのお問合せも数多くあり、今後は直売施設等を含めた販路の拡大など地産地消の推進についても検討します。料理コンテストなどを開催し銚子市民に農業への関心を高め、野菜のおいしい食べ方や、食育の推進などピーアール活動を積極的に実施していきたいと思えます。